# 人権と赤十字(課題)

「**新型コロナウィルスに関連する人権問題**-問題の背景と私自身ができること」
④5/22,一部　課題の説明　⑤5/25,⑥6/2,記事および参考資料を読み,自分の考えをまとめてレポートにする。
⑦6/12　ディスカッション(テーマ別小グループで)

---

新型コロナウィルスの感染拡大により,これまで隠れていた人権の問題が次々と起こってきています。女性や子ども,医療職者,そして不幸にも,新型コロナウィルスに感染した方々が,思いもよらない差別的な対応を受けることになっています。人々の苦痛を和らげるため,人道を基盤とする赤十字は,これら人権侵害の理不尽さに人々が気づけるよう,心理社会的な立場から,人々に向けた発信をおこなっています。

いくつかの新聞記事を読み,また,関連する条約,資料,演説等を参考にして,「**新型コロナウィルスに関連する人権問題とは-問題の背景と私自身ができること**」というテーマで自分の考えをレポート **2 枚程度(表紙別)**にまとめてください。どれかに焦点を絞っても構いませんが,すべての記事をしっかり読んでください。また,誰かの意見を検索して真似することなく,自分自身の考えをまとめてください。

レポート提出期限(仮)は,**6 月 22 日(月)16:30 教務室内　平野の提出ボックス**に,クリアファイルに入れて提出してください。

よろしくお願いします。

【記事】

1. **「誰がコロナ」小さな村一変**　（朝日新聞 2020.4.30　朝刊）
2. **「虐待しそう」相談急増　大学生らの 24 時間チャット**　（朝日新聞 2020.4.24）
3. **大勢　大声　馳議員ら視察に批判**　（朝日新聞 2020.4.28　朝刊）
4. **感染疑われ　心ない言葉**　(新潟日報　2020.4.29　朝刊)

【関連する条約,資料】(下記,URL をクリックして,参照してください)

1. **子どもの権利条約**　((Unicef Web ページ) Retrieved from https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig.html
2. **女性差別撤廃条約**　(男女共同参画局 Web ページ) Retrieved from http://www.gender.go.jp/international/int_kaigi/int_teppai/joyaku.html
3. 神田 芳明(2017).「ネットの書き込み」に関する法的問題点,特集　ソーシャルメディアと情報モラル,　国民生活,　6-9.　Retrieved from http://www.kokusen.go.jp/wko/pdf/wko-201707_02.pdf
4. **新型コロナウイルス感染症対策に関するメルケル首相のテレビ演説**（ドイツ連邦共和国大使館・総領事館 Web ページ 2020.3.18）

Retrieved from https://japan.diplo.de/ja-ja/themen/politik/-/2331262

**5.** 日本赤十字社

- 新型コロナウイルス感染症対応に従事されている方のこころの健康を維持するために
  Retrieved from http://www.jrc.or.jp/activity/saigai/news/200330_006139.html
- 「感染症流行期にこころの健康を保つために」シリーズ
  Retrieved from http://www.jrc.or.jp/activity/saigai/news/200327_006138.html
- 新型コロナウイルスの３つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～
  Retrieved from http://www.jrc.or.jp/activity/saigai/news/200326_006124.html

# 「誰がコロナ」小さな村一変

2

## 役場や学校へ非難相次ぐ

新型コロナウイルスによるパニックは、デマによるものだけではない。

ビニールハウスが広がる四国の小さな農村で、3月上旬、村立小学校に通う男児が新型コロナウイルスに感染した。国内感染者がまだ300人程度の時期だ。

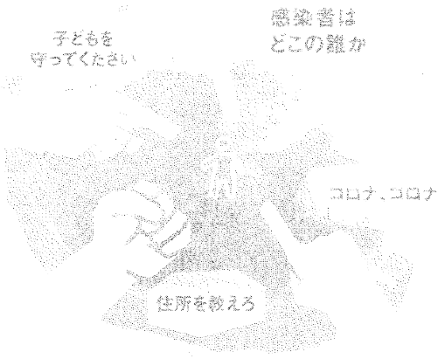
親類が感染し、男児は濃厚接触者として検査を受けていた。保健所から連絡があり、教育長は驚いた。

「まさかうちの村で」

県はこの日夕、学校名の公表について村と協議した。情報が公開されないことで生まれる地域の混乱を避けたい、という思いがあった。男児の保護者は「子どもを守ってください」と念押しした上で、公表に同意したという。

県知事は同日夜の記者会見で、「10歳未満の男児」と匿名で発表。「補足」として自治体名と学校名に言及した。そこから、情報を求めるうねりが起きた。

「何年生か言ってもらわんと、怖くてたまらん」。学校には多くの保護者から求めがあった。




管轄の保健所や村役場にも電話が相次いだ。不安を訴える人もいれば、「感染者はどこの誰か」と、名前や住所の公表を強く要求する声もあった。「個人情報は明かせない」と応じる職員に「やめてしまえ！」と怒鳴る人もいた。

「互いに顔を知らない人がいないような小さな村ですから」と役場の職員は言う。村を歩くと、農家の男性は「うわさで聞いた」として、「あそこの息子らしいよ」と集落の一角を指さした。知人からも「あの地区から出たみたいだけど、誰ね？」と電話があったという。

男児の家族も無縁ではいられなかった。「家族にも電話があって、今も傷ついている」と行政関係者は明かした。

男児の感染が発表されてから1週間。村長は県に要請して「風評被害対策会議」を開き、「不安が不安を呼び、感染者や関係者が風評被害に遭われていることは大変残念」とのメッセージを出した。村長は「騒動の中で人から出てくる言葉が、これほど普段と違うとは」と振り返る。

生活圏に感染者がいるという人々の不安が高まると、感染者が属する組織も攻撃や排除の動きに巻き込まれる。

学生の懇親会でクラスター（感染者集団）が発生した京都産業大には、「大学に火をつけるぞ」と脅迫電話があった。対コロナの最前線となった名古屋市の南生協病院では、看護師の子どもが保育園から登園を拒まれた。

福島県では3月14日、郡山女子大の70代女性教授＝任期満了で退職＝が感染したことが明らかになった。県内2人目だった。

「コロナ、コロナ」

翌15日、JR郡山駅のホームで、大学の付属高校の女子生徒2人が40代くらいの男性に指をさされ、こう言われた。2人は運動部で、顧問の教諭に泣きながら報告したという。

別の生徒は、制服で歩いていると「（ウイルスを）わざと広めているのだろう」と高齢の男性に非難された。高校は4月上旬まで制服での登校をやめた。大学とは道路で隔てられており、保健所が認定した濃厚接触者は大学の関係者14人だけだった。

大学と付属高校に電話やメールなどで寄せられた非難や抗議、嫌がらせは約150件にのぼった。「死んじゃえばいい」「女性教授の住所を教えろ」。佐々木真子校長(63)は「感染者が1人出ると、組織すべての問題とみなされる。憎むべきは人でなくウイルスなのに」と話す。

**「みる・きく・はなす」はいま**

（朝日新聞 2020.4.30　朝刊）

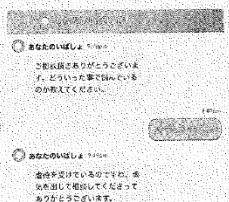
# 「虐待しそう」相談急増

## 大学生ら24時間運営のチャット

### コロナで外出自粛 影響か

大学生らがインターネット上で運営している24時間制のチャット相談で、新型コロナウイルス関連の問題が急増している。「ストレスで夫とけんかしてしまう」「このままでは子どもを虐待してしまいそう」など、相談の中心は家庭内のトラブルや虐待などだという。

NPO「あなたのいばしょ」が3月に立ち上げたチャット相談（https://talkme.jp/chat/）には、連日のように深刻な悩みが寄せられる。NPO代表で慶大3年の大空幸星（こうき）さん（21）は、だれでも気軽に確実に「頼れる人」にアクセスできる仕組みをめざす。



チャット相談のサンプル画面＝「あなたのいばしょ」提供

年齢・性別を問わず、無料で原則1回40分の相談を受け付け、匿名でも相談可能だ。カウンセリングに必要な「傾聴スキル」などの訓練を受けたボランティア相談員約30人が応じる。相談が多い時間帯は午前0時から朝方で、深夜は時差を利用して、アメリカ在住のボランティアも応対している。

チャットなら、電話のように声を出さなくてもいいので、周囲を気にせずやりとりできる。

3月28日から4月4日にかけての相談件数は1日平均208件。それ以前の1日平均32件から大幅に増えた。「コロナ」という単語を含む相談は以前の4倍に増えており、一緒にチャット内で頻繁に使われる単語は「自粛」「母親」「暴力」「子ども」「部屋」など。家庭内暴力（DV）や虐待をうかがわせる言葉が並ぶ。

新型コロナウイルスに関連した相談内容を分析すると、最も多いのが育児や家事によるストレスで、全体の4割弱を占める。相談者の平均年齢は32歳、9割超が女性といい、「下の子が小さいのに小学生の上の子が休校で家にいるから、ストレスが大きい」「家事が増え、ストレスがたまり夫とけんかしてしまう。外出もできない」といった内容だ。自らが虐待の加害者になってしまいそうだと打ち明ける人もいる。長引く外出自粛要請や在宅勤務が影響している可能性もある。

未成年を中心に、親や親族から虐待を受けるなどして自宅が安全な場所ではない人たちもアクセスしている。「同居親族から性的虐待を受けていて、家にいられない」「家にいると母親から暴力を受けてしまう」といった切実な相談だ。緊急の場合、関係機関と連携することもあるという。

電話相談などを運営する団体の中には、新型コロナの影響で時間短縮などを余儀なくされているところもあるが、「あなたのいばしょ」は今後も24時間体制を維持する考えという。大空さんは「子育て中の人は、『新型コロナで大変なのはみんな一緒』と考えがちだが、そう思わずに相談して欲しい。一人で抱え込まないで」と訴える。

（及川綾子）

（朝日新聞 2020.4.24）

# 大勢 大声　馳議員ら視察に批判

## 女性支援団体「許可なく写真投稿された」

自民党の国会議員らが10代女性の支援団体を視察した際の振る舞いに批判が広がっている。団体側は新型コロナウイルスの感染拡大で深刻化する貧困や性搾取の問題を知ってもらいたいと受け入れたものの、議員側は多数で来訪して密集状態をつくり、大声を出したり、許可なく撮影してSNSにアップしたりしたという。団体側は「暴力に苦しむ女性を救う場で、あまりにも自分の加害者性に無自覚だ」と反発している。

馳浩元文部科学相が会長を務める「自民党ハウジングファースト勉強会」が22日に視察したのは、一般社団法人「Colabo」が東京・新宿で運営するバスカフェ。無料で食事や衣服を提供し、10代女性の居場所作りをしている。

Colaboによると、前日に阿部俊子・衆院議員から視察の申し入れがあり、「5人までなら受け入れ可能」と伝えた。ところが議員側は、秘書や新宿区議も含めて約15人がやって来たという。

馳議員らはカフェの設営に参加。性被害のトラウマから男性に恐怖感がある女性が働くなか、大声で秘書を呼ぶなどした。作業を続けられなくなった女性もいたという。さらに、虐待から逃れて居場所を知られてはいけない女性もいるにもかかわらず、許可を得ずに写真を撮り、「ボランティア第一弾」「10代少女の寄り添い支援に参加」とツイッターなどで発信した。

馳議員が「女の子だから」とテントなど重い荷物は女性に渡さず、若手議員らに運ばせる場面もあったといい、Colaboの仁藤夢乃代表は「当事者運動であることを重視し、普段はみんなで作業を分担している。女性は力ない存在で守ってやろうという上から目線を感じた。威圧的な態度がなぜ問題なのか考え、反省して欲しい」と話す。

Colaboは24日、こうした問題に加え、少女の腰を馳議員が両手で触ったとして抗議文を公表。馳議員は25日、公式ホームページで「不愉快な思いをさせた事となり、おわびします」とする一方、セクハラの訴えには「狭い空間で行き来しており、腰に手を当てたかどうかは、全く意識に残っていない。事実なら大変申し訳ない」とコメント。ただColaboに連絡はなく、ツイッターなどでは「謝罪といえない」と批判を受けている。朝日新聞は馳議員の事務所に取材を申し入れたが、27日夕までに回答はなかった。

（江戸川夏樹）

「Colabo」が女性のために開く無料カフェ＝15日、東京・渋谷

### 団体抗議「少女の腰に手」　本人側「事実なら申し訳ない」

（朝日新聞 2020.4.28　朝刊）

# 感染疑われ 心ない言葉

## 看護師への差別 本県でも

新型ウイルス

## 「いつまで耐えられるか」

新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、日々多くの患者と向き合う医療現場では、医師や看護師らが常に感染リスクを抱えながら懸命に職務を果たす。だが、彼らの中には周囲から「ウイルスに感染しているのではないか」などと、いわれのない差別に苦しむ人もいる。新型ウイルスの患者を受け入れる県内の病院に勤める看護師の女性(31)もその1人。「私もいつまで耐えられるか」。女性は言葉を詰まらせた。

3月下旬のある日、同居する母親から衝撃的な話をされた。

「あなたの仕事のことで、お母さん、しばらく仕事を休まなければならなくなったの」

詳しく聞くと、学童保育で働く母親が帰り際に、上司から「お宅の娘は看護師で、ウイルスに感染しているかもしれないでしょう。あなたもしばらく出勤しないでほしい」と言われたという。靴やロッカー、鉛筆1本まで消毒をされた。母親は、ショックを受けて言い返すこともできなかった、と打ち明けた。

女性も同じような経験をした。町内の回覧板を届けたとき、隣人は指先でつまむようにして受け取り「ウイルスが怖いからこれからは来ないで。町内の会合にも来ないように、ご両親に2人も同居するようになった。後輩の1人は両親から「高齢の祖父母に感染させたらどうするのか。お前が辞めても病院は困らないだろう」と言われた。その後輩の身を案じたのかもしれないが、家出同然で家を飛び出してきたという。

女性は「患者さんを見捨てて仕事を辞めるなんて考えられないけど、家族も大事だ。医師も看護師も技師も悩みながら病棟に向かっていることを、せめて家族には理解してほしかった」と語る。

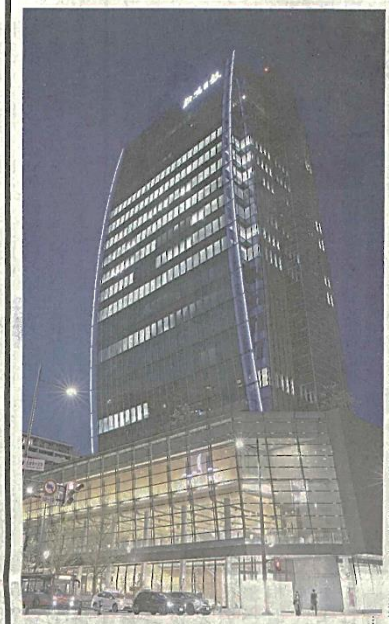
政府や日本赤十字社は、医療従事者に対して誤解や偏見に基づく差別を行わないように求めているが、こうした差別は各地で起きている。「ウイルスへの恐怖と、周囲からの心ない言葉で職を離れる人もいる。私もいつまで耐えられるか。このまま差別が横行すれば医療が崩壊してしまう」と危機感を募らせる。

### 医療崩壊招く 県看護協会会長

県看護協会の斎藤有子会長(62)は「看護師は周囲から向けられる差別的言動と、自らが感染するリスクの双方に不安を抱えている。こうした状況が続き、休職や退職に追い込まれれば医療崩壊が起きかねない」と警鐘を鳴らす。

県看護協会には「親が看護師という理由で、子どもが周りに避けられている」などの相談が寄せられていく求めている。

斎藤会長は「看護師を追い込めば、病院や保健所、介護施設などあらゆる場面で十分なサービスを提供できなくなる。新型ウイルスへの恐怖は分かるが、差別や偏見に基づく心ない言動は控えてもらいたい」と強るという。



### 感謝の青 メディアシップ

新型コロナウイルス感染防止の最前線で働く医師や看護師らへの感謝を込め、新潟日報メディアシップ(新潟市中央区)のライトセイル(光の帆布)が28日夜、青色にライトアップされた=写真=。

感染リスクを抱えながら奮闘する医療関係者に感謝の思いを伝えようと、国内外で広がる「#(ハッシュタグ)Light It Blue(ライト・イット・ブルー)」という取り組みに合わせ、新潟日報社が行った。患者の早期回復や家族へのエール、一日も早い収束への思いも込めた。

5月31日まで午後6時半~同10時に点灯する。

(新潟日報　2020.4.29　朝刊)